33. Child C肝硬変における担癌症例と非癌症例の予後比較

井谷　修，大和田高義，森田秀和
窪田賢輔，斉藤秀一，国吉　孝
関　秀一　（横浜労災）

肝硬変におけるChild-Pugh分類は肝硬変の予後と相関するといわれており，肝細胞癌の合併も肝硬変の予後を決定する重要な因子である。今回当院におけるChild C肝硬変の患者で肝細胞癌を合併した例と，非癌症例の予後を比較した。Child Cに移行してから死亡するまでの日数は，非担癌症例（6例）では52±47 S.D.日，担癌症例（39例）93±124 S.D.日であり，2群間に有意差は認められなかった。

34. 当院における内視鏡的胃瘻造設術（PEG）施行症例の検討

中尾圭太郎，豊田光孝，浅海　直
横山三尚，安達佳宏，山崎俊司
西出敏雄，大島仁士
（松戸市立福祉医療センター東松戸）

過去7年間に当院で胃瘻を造設した49例について検討した。平均年齢は76歳で，基礎疾患は脳血管障害が7割を占め，適応理由は頻回の誤嚥が43%，自発的経口摂取不能が33%と多かった。術後合併症は発熱が13%と最も多く，重篤なものは腹膜炎が6%みられ，うち2例が死亡した。血液検査上は術前後で有意差はなかったが，嚥下性肺炎の発症率は有意に低下した。また，在宅での栄養管理が容易となった。

35. 潰瘍性大腸炎に発生したpyogenic granuloma

磯野貴史，笠貫順二，小田佳世
小山秀彦，深澤元晴，吉川信夫
金子良一　（船橋中央）
近藤福雄　（同・病理）

Pyogenic granulomaは，口腔外科・耳鼻科領域に好発する易出血性の隆起性病変である。今回，潰瘍性大腸炎を背景にして貧血を契機に発見されたpyogenic granulomaを経験したので，口腔以外の消化管に発生したpyogenic granulomaの症例について文献的考察を加え報告する。

36. シクロスポリン静注療法が著効した特発性血小板減少性紫斑病合併重症潰瘍性大腸炎の1例

加藤靖隆，稲田麻里，清水直美
平野達也，野瀬晴彦，田中武継
三村正裕，田口忠男，岩間章介
（千葉労災）

症例は46歳女性。主訴は下血。注腸造影・大腸内視鏡検査にて潰瘍性大腸炎（UC）の診断がついた。また入院後血小板減少も認め，骨髄検査にて，特発性血小板減少性紫斑病（ITP）の診断がついた。両疾患に対しPSL 60mg/日投与したが効果認めず，シクロスポリン（CsA）投与したところ，UC・ITP共に寛解導入に成功した。CsAにて寛解導入されたUC・ITP合併例の報告はなく，興味ある症例と考えられた。

37. Monosomy 7を伴うPh陽性急性リンパ性白血病の1例

小田佳世，深沢元晴，磯野貴史
仲野敏彦，久満董樹（船橋中央）

42歳男性。平成13年5月発熱出現。6月入院。WBC 13700，Hb 10.1，PLT 13.6万，LDH 1143，BMA芽球94.8%，POX(-)，PAS(-)，ESαNB(-)，N-ASD-Cl(-)，マーカーCD10，CD19，CD13，CD34，HLA-DR，TdT，CyIgM陽性，MPO陰性。染色体45XY，-7，t（9; 22）7/20 cells。以上よりALL（L2）PreBと診断。JALSG ALL 97プロトコール施行しCR。Monosomy 7を伴うPh陽性白血病はAcute Mixed Leukemiaの報告もみられ未分化の白血病に属する予後不良疾患群であり報告。

38. EBV抗体価異常を認めた悪性リンパ腫の1例

田中宏明，横田　朗，趙　龍恒
（千大）
小野田昌弘，布留川潔
（川鉄千葉）
寺野　隆，平井　昭
（千葉市立）

70歳男性，発熱，血小板減少，脾腫，LDH・sIL-2R高値を認め，入院。症状・検査データは精査中に変動を認めた。リンパ節腫脹は認めなかったが，骨髄生検にて異型リンパ球の浸潤があり，CSIVBの悪性リンパ腫と診断した。EBV抗体価異常があり，EBVにより発症した悪性リンパ腫と考えられ，THP-COP療法6コースにて反応なく，非常に治療抵抗性であった。